

目的 天台、真言の平安朝に発展した教団の僧衣を教衣と総称し、戒律による僧衣を律衣というが、これに対し鎌倉時代に新しく渡来した禅宗の僧衣を総称して禅衣という。後者は袈裟及び襯身の衣を含めて称するので、従来と異なった様式の法衣が用いたためのである。そこで、仏教界での革新とを与え、重要な役割を果たしている禅宗の教衣、その法衣の構成、縫製について考察し、更に衣裾等における古文書や天台宗や真言宗の法衣との比較、関連を追求した。

方法 京都の臨濟宗梅澤長福寺 1、天台宗延暦寺、真言宗東寺、倉科館、国立博物館、古文書等により調査研究する。

結果 東西の名著「興禪護國論」の下巻「禪宗支目第八」の修行の行儀の中に法服の二とについては「大圓の法服を用ふべし」とあるように、かつて法衣は中國様式であったといふ点から、直線大袖の袖丈も不成り長く、その他、道具衣とも称する法衣も、他の宗派に比べ十分倍から二倍ほどの差異が認められ、又、縫製上では種々の倒し方、縫い目、各部の縫製上の寸法も、着衣方法時も、他宗にみられない点からか加うことが出来た。